

＜報 告＞

津波被災住民と仏教寺院

——スリランカ南岸海村の事例から——

高 桑 史 子

1. はじめに

2004年12月26日朝におこったインド洋地震津波は、インド洋周辺各地に甚大な被害をもたらした。スリランカにおいては、北西岸の一部をのぞいて、ほぼ全域が壊滅状態になり、全体の死者は3万人以上、9万世帯以上が住宅を失った。

本報告では、このような不幸な自然災害において、宗教施設が人々の心のささえになっているとともに、復興に向けた活動の拠点となっていることを明らかにしたい。筆者は津波直後の2005年3月から2008年9月にかけて、4回にわたりそれぞれ10日間ほどの短期滞在であるが、南西岸から南岸の海村の状況を調査している。ここでは、20年余り通い続けている南岸のマータラ県にある海村ダクヌガマ村（仮名）の状況をみながら、住民と仏教との関係を考える。現在のスリランカの仏教をめぐる状況、あるいは仏教寺院をめぐる状況として、有名寺院が繁栄する半面、村落単位の小規模な寺院が衰退しているという指摘がある。また、家族と寺院との結びつきが強くなっているのに対し、村落単位の「地域の寺」という意識が希薄化しているともいわれる。津波後の人々と寺院との関係を見ることで、人々にとって寺院の果たす役割を考察する。

2. ダクヌガマ村の仏教寺院

約1100世帯、5000人余りが居住するダクヌガマ村は、村内とその周辺に住む約100世帯のムスリムを除くと⁽¹⁾、全員が仏教徒で、大半がカラーワ（漁民カースト）である。全世帯の半数以上が漁業ないしそれに関連した職業に就いている⁽²⁾。村には4つの寺院がある。最古の寺院は19世紀中頃に建てられたシャム派の寺院であり、主に近隣に住むゴイガマ（高位とされる農民カースト）の人々が参拝をしていた。やがて19世紀末から20世紀初頭にかけて、植民地体制下で経済的力をつけてきたカラーワの家族が、ゴイガマに対抗して3つの仏教寺院を建てた。

独立後、これらの4寺院は国民の仏教意識の高まりによって参拝者が増え、境内の整備も進みつつあったが、やがて建立に係わりその後も寺院の運営に影響力をもっていた有力家族が村外に転出するとともに、寺院は寂れつつあった。この要因としては、寺院がそれぞれに檀家獲得で競合状態になったためであり、さらに収入の不安定な漁民家族にとって檀家としての勤めが重荷になっていることがあげられる。しかしながら、それは必ずしも住民の仏教離れを意味するのではない。つまり、住民にとってたとえば、寺院改修のための寄進や祭礼に向けた定期的な寄金は重荷ではあるものの、死者の追善供養、人生の節目や新たな旅立ちの際に僧侶を招いて実施されるピリット儀礼（護呪教典を唱える儀礼）は重要なものであり、家族単位で行われている。村統合の寺院としての機能よりも、個々の家族との結びつきがより重要になっているともいえる。最も古いシャム派の寺院は、歴代僧侶がマントラ（祈祷のための呪文）の知識を伝えてきており、そのために人々はマントラを唱えてもらうために寺院にやってくることが多い。また、他の寺院も境内の一部が役所の支所として利用されたり、日曜学校を開講している寺院もある。近年では高学歴化により、日曜学校よりも補修塾に通う子どもが増加している。

ダクヌガマ村の人々にとって、寺院はいつも村内にあるものであり、村の

日常の風景にとけ込んでおり、寺院側からの祭礼に対する呼びかけにはあまり積極的ではないが、必要に応じて参拝したり僧侶を招くことで絶えず寺院との関係を維持しているといえよう。また、どの寺院も常に門が開放され、人々は自由に境内に入ることができる。

3. 津波と仏教寺院

2004年のインド洋地震津波ではダクヌガマ村の海岸を津波が襲い、多くの方が亡くなり、漁船に甚大な被害が出た。住宅の損壊も著しく、海岸近くに建てられた家の大半が全壊ないしは半壊の被害を受けた。被災者の中には、内陸部の親戚の家を頼る者もいたが、その多くはダクヌガマ内の寺院に避難した。住宅に影響がなくとも、新たな波の襲来を恐れた人々も寺院に避難した。つまり、いつも開かれている4カ所の寺院は重要な避難所となったのである。寺院の境内に避難した人たちに対し、周辺住民はいち早く食事の提供をしている。これは、檀家が当番を決めて僧侶に食事の布施をしていたのと同様であり、これまであまり食事の布施を積極的に行ってこなかった家族も被災者に食事や衣類、寝具を提供している。こうしてダクヌガマ村では、2～3日後に開始された政府や支援団体の救援活動よりも前に住民によるインフォーマルな支援が行われた。初期の救援・復興支援活動が比較的スムーズに行われた背景には、地域住民の多くが寺院内に避難していたため、情報の伝達が迅速に行われたことが考えられる。

また、津波の時には漁民の多くがダクヌガマ以外の漁業基地に滞在していた。大型漁船で操業する漁民にとって、ダクヌガマ村の浜は大型漁船が停泊するのにふさわしくないため、西海岸の大型漁港のある漁業基地にいたのである。ちょうど、満月ポーヤ日で休漁日にあたり、漁を終えて港に着いた頃に津波が襲ったため、まだ上陸せずに船上や船着場にいた人たちが犠牲になった。

ある家族の場合、村内の高台にあった家は無事であったが、夫が南西岸の漁業基地のヒッカドゥワを基地に操業しており、夫が津波で行方不明になっ

た。家族や親族が手を尽くして搜索をしたが結局遺体は見つからないままであった。妻や子どもたちは彼が戻らないことを悟り、僧侶に死者供養のためのピリット儀礼を依頼したが、僧侶は津波で多くの死者が出たため多忙であり、結局、この家族は僧侶ではない、在家者が執り行うギヒピリットを実施して、さらに1週間後に寺院に避難している人たちに食事を布施（ダーネ）としてふるまった。

ダクヌガマ村には2カ所の浜がある。そのうちの1カ所の浜では大きな被害があった。もう1カ所の浜では波打ち際に停泊させたり、浜に置いてあった漁船が被害を受けたが、幸いにも人的被害はなかった。この浜には以前より一本の菩提樹が生育していた。いつの頃かこの菩提樹の根元には、家庭で祀っていて古くなったり壊れたりした仏像が置かれるようになっていた。新しい像に買い替えると、これまで祀っていた仏像を菩提樹の根元に置くようになったのである。津波後に、浜が津波被害を受けなかったのは、この菩提樹のおかげであるということを人々が語りはじめた。やがて菩提樹の周囲を整備し、根元に新しい仏陀像を建立する計画が立てられた。計画の中心は、主に浜を使用する漁民で、彼らが家々をまわったり、浜近くを通る人々に呼びかけ、浄財を集め始め、津波の3カ月後には建立のための工事が開始された。フェンスを張り巡らし、タイルを敷き詰め、2年後には仏殿が完成し、ガラスのケースに収められた小さな仏陀像が安置され、周囲にはライトがともされるようになった。津波を契機に新しい仏陀像が浜に誕生したのである。

4. おわりに

ダクヌガマ村の近くのコッテゴダ村は津波により、甚大な被害を受け、海岸近くに建てられていた寺院が破壊され、また僧侶も亡くなった。境内にあった仏陀像をはじめ多くの像が破壊された。被災住民は生活再建に向けて日々艱難辛苦のなかで、破壊され、破片となった像の残骸を集めては、漆喰でつなぎ、もとの姿の復元に向けた行動をすぐに開始した。津波から3年半

後には復元された仏陀像が完成し、新たにガラス張りの仏殿が建てられたなかに安置されるようになった。

ダクヌガマ村やコッテゴダ村の状況を見ると、人々にとって寺院が精神的支えになっていることがわかる。コッテゴダ村のように破壊された仏陀像の復元は生活再建と同時進行で行われており、このような活動自体が人々を癒しているともいえよう。また災厄から護ってくれる存在としての菩提樹や仏陀像の役割も重要である。

スリランカの社会福祉省によれば、社会福祉政策は進んでおらず、また高齢者や障害者の関連施設の整備も進んでいないし、ボランティアの投入に依拠せざるを得ない状況である。しかし、社会福祉施設に替わるものが宗教施設である。スリランカでは施設入居者に対し、布施の形で食事や日用品が配給されるシステムが存在している。小さな村の小さな寺院に併設している高齢者、障害者、あるいは孤児院にも絶えず食事の布施が行われている。富裕層のなかには、あえて、有名な施設ではなく、無名の施設に布施を行おうとする者もいる。また、海外の団体もこれらの施設に支援を行うことが多い。今回の津波でも、人々はまず、地域の寺院に行き、そして寺院に避難した人々にいち早く地域住民から支援の手がさしのべられている。

さらに、津波後の精神的ケアでも寺院の存在は大きい。人々はたとえ、普段忙しくて寺院に参拝にいかなくとも、寺院との潜在的な関係は断絶しているわけではない。今回の津波被害において、僧侶や寺院の関係者がカウンセラーの役目を果たしている場合もある。あえて社会福祉政策や専門的なカウンセラーの養成という方針をとらなくとも、スリランカでは従来からの宗教施設がこれに替わるものとして存在しているといえよう。以前のように寺院への寄進が行われなくなり、檀家の数もほとんど変化していないものの、宗教実践の場として、あるいは社会参加型宗教としての仏教の存在の大きさが今回の津波によって明らかになったといえよう。

注

- (1) 1990年代末まではタミル人が2世帯居住していた。
- (2) ダクヌガマ村を含むスリランカ全般にわたる概況は〔高桑2004, 2008〕などを参照願いたい。

参考文献

- 高桑史子 2004『スリランカ海村社会の女性たち—文化人類学的研究—』八千代出版
——— 2008『スリランカ海村の民族誌 開発・内戦・津波と人々の生活』明石書店